

明治大学博物館広報誌

MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 79

あなたの知らない
江戸時代

特集

明治大学博物館2022年度特別展

新しいお殿様 —所替・その後—

NEWS / 展示 Zoom in ! / 博物館研究最前線 /
収蔵室から / M2 カタログ

明治大学博物館2022年度特別展
新しいお殿様 — 所替・その後 —

江戸時代には幕府の命令で大名の領地が変わることがありました。これを所替、転封などと言います。ひとたび所替となれば大名は親しんだ領地を離れ、新しいお殿様として見知らぬ土地を治めることとなります。現代人の私たちだって、住む所が変わったり、転勤したり、はたまた会社が遠く離れた土地に移転するとすれば、新しい生活に苦労はつきもの。思わぬ事態に頭を抱える事もあるでしょう。それが江戸時代となれば、武士たちの所替の苦労は並大抵ではないよう……展示ではこれまで語られる事のなかった所替のその後、新しいお殿様による統治の始まりに迫ります。

舞台は？

延享4年（1747）3月、磐城平領（現・福島県いわき市）を治めていた大名の内藤家は、延岡領（現・宮崎県延岡市）に所替を命じられました。内藤家にとってこの所替は青天の霹靂。予想もしないことでした。江戸藩邸にいた藩主・内藤政樹は、この所替がうまくいくか気をもんでいました。内藤家が磐城平に入ったのは元和8年（1622）のこと。それから125年もたつたので、所替についての勝手がわからず、さらに新しい領地は遠い延岡だったからです。藩士達は、磐城平から延岡へ、約一ヶ月半もかけて移動し、8月12日に前領主の牧野家から城と領地を引き継ぎます。さあ、延岡領で内藤藩の新しい統治が始まります。



関原合戦画巻 内藤家長

内藤家ってどんな大名？

内藤家は7万石の譜代大名。上の絵は関ヶ原の前哨戦、伏見城の戦いで城を守って敵を撃つ内藤家長の姿です（「関原合戦画巻」注1）。内藤家は三河（現・愛知県）時代から徳川家に仕えました。家長の姿は、この絵巻の他に、「内藤家長・警崇院画像」（レプリカ展示／原本は延岡城・内藤記念博物館所蔵）でご覧ください。

内藤藩の新しい領地は？

御城があったのは日向国（現・宮崎県）臼杵郡ですが、飛地を日向国宮崎郡、豊後国（現・大分県）3郡（大分・速見・国東）に有していました。展示では「筑後筑前豊後豊前四ヶ国之図」（注2）、肥後日向両国之図」（注3）、「延岡御城附絵図（臼杵郡全図）」（注4）などの大型絵図を出展します。江戸時代の絵図で領地をじっくり確認してください。

旧領と新領、何が違った？

一番の違いは領地が西国で江戸から遠いということ。大名は江戸藩邸と領地の両方に家臣を配置しています。3日程度で行き来できた旧領地と違い、藩内で意思決定をするだけでも日数がかかりました。また、西国には大坂や長崎に幕府の支配拠点があり、これへの対応も必要でした。展示では、江戸から長崎までを描いた「日本東西道中画」（注5）と共に、所替で新たに生じたさまざまな要素を紹介しています。

どんな苦労があったの？

一番の問題はお金。大坂で新しく商人との関係を築く必要があり、内藤藩は物資の調達や西国の経済圏に適応することに苦労します。さらに、延岡城も家中屋敷も傷みがひどく、これらの修復も必要でした。所替で苦労した藩士達でしたが、さらに禄高の支給率を下げる命令も出されています。「日向国延岡城石垣築直堀浚之絵図」（注6）や所替後に出示された藩士への禄高支給に関する命令などを展示します。

領民との関係は？

磐城平を離れる時には、特別な関係があった旧領の領民の中には、延岡への荷物輸送を手伝う者も、延岡へ行って仕えたいと願う者もいました。そこには領民の内藤家への特別な思い入れが窺えます。新領では税を取り立てる領主として、所替早々に一揆にも遭いますが、橋や水利などのインフラ整備を分担したり、城下の御祭りに藩の武器を貸し出したりと、税を取る・取られるというだけの関係ではない姿も見えてきます。さらに、内藤家は磐城平を離れる際に家臣のリストラをしていたので、転封後1、2年は新領の領民から実務を担える人材を集中的に召し抱えています。こういった様子を「古由緒書」（注7）や「今山八幡宮御神幸行列絵巻」（パネル展示／延岡城・内藤記念博物館所蔵）などをご覧ください。



今山八幡宮御神幸行列絵巻（部分）



延岡御城附絵図（臼杵郡全図）



肥後日向両国之図



筑後筑前豊後豊前四ヶ国之図

見どころ 絵図！絵図！！絵図！！！！ なかなか見る事が出来ない大型絵図を4点出展します。この機会をお見逃しなく。

宮本真也副館長着任

専門は社会学、社会哲学です。現在の地平だけで私たちは考えたり、説明を試みますが、博物館を訪れるたびに気づかされるのは、そうした試みがおちいりがちな単純さです。博物館運営に携わってから多くの資料を、スタッフのみなさんから紹介していただきましたが、そのつど自分の知識と経験の時代的制限を実感しました。この「常識」を揺さぶられるような「学び」の楽しみを、より多くの学生や市民のみなさんにも共有していただけますよう、尽力して参りたいと考えております。



宮本真也副館長

2年間副館長としてご尽力いただいた長尾進教授（国際日本学部）の後任として、去る4月1日、情報コミュニケーション学部の宮本真也教授が着任されました。



日本東西道中画

展示の世界がどんどん広がる展示関連講演会も開催します。

リバティアカデミー特別企画 明治大学博物館2022年度特別展開幕記念講演会 「幕末期、民衆の所領替え反対運動」

知らなかった！！
江戸時代に
そんなことがあったの？

講師 明治大学文学部准教授 野尻泰弘
日時 10月15日(土)10時半からzoom配信開始(申込締切10/14(金)10:00)
10月28日(金)24時配信終了
定員 480名
講座の詳細と申し込みは下記URLから
URL <https://academy.meiji.jp/course/detail/6163/>
聴講方法 配信開始時刻にEメールで視聴URLをご案内いたします。

参加費 無料
事前 申込制

講演内容

江戸時代、どの土地を誰が支配するかを決めるのは、將軍の専権事項でした。たとえば大名の配置転換である転封^{てんぽう}がそれです。転封に反対するのは幕府の統治に従わないということになり、幕府の権威に関わる大問題になるのです。ところが、被支配者である民衆はしばしば領地の変更を拒み、反対運動を展開しました。それは駕籠訴^{かごこゑ}という非合法な方法で決行されることが多くありました。この民衆たちの行動からは、当時の社会の様子が読み取れます。本講演会では、越前国（現・福井県）で発生した所領替えに関わる民衆運動を観察します。そして、運動の主体であった民衆はもちろんのこと、複雑に混迷した近世社会を眺めます。

リバティアカデミー特別企画とは

特別企画は、通常のプログラムにはない貴重な「マナビ」を体験できる企画で、会員以外の方でも自由に参加いただけます。

ワークショップ@バックヤードの開催



コロナ禍によって制約の多い学生生活を充実させるため、大学が取り組むサポート事業の一環として、収蔵品をバックヤードの施設で特別閲覧するイベントを始めました。5月21日の第1回は豊臣秀吉や徳川家光、譜代大名内藤家ゆかりの古文書を手にとって実見。第2回、3回は考古学の展示を見学の後、土器への注記体験、埴輪の接合体験をおこないました。定員は各回12名ですが、日本史や考古学の専攻生以外にもさまざまな学部から学生が集まり、めったにできない経験をしていただくことができました。

企画展コラボメニューを 学生と共同開発

企画展「古代常陸の雄・三味塚古墳」(会期7月8日〜8月7日)の開催に合わせ、駿河台キャンパス内の喫茶施設「カフェパンセ」にて、「三味塚古墳発掘カレー」を提供しました。このメニューは博物館学生広報アンバサダーが提案し、カフェパンセと共同開発したものです。れんこんや干しいもなど茨城県の名産をちりばめ、前方後円墳型に盛られたライスをストック型のスプーンで発掘すると、中からトッピング(遺物)が出現するなど趣向を凝らしました。完売日が相次ぎ、ご来館の皆さまに好評を博しました。



城下町延岡における祭礼 ～今山八幡宮御神幸行列を題材に～

講師 延岡城・内藤記念博物館 博物館係長(学芸員) 増田 豪
日時 11月16日(水)14:00から15:30
会場 明治大学博物館教室(オンラインで同時配信)
定員 対面聴講定員20名、zoom聴講定員80名

10月14日から明治大学博物館ホームページで申し込み方法を告知します。



今山八幡宮御神幸行列絵巻(部分)

参加費 無料
事前 申込制

講演内容

展覧会では、延岡城下で行われていた祭礼の様子を描いた「今山八幡宮御神幸行列絵巻」の画像をパネル展示します。これに合わせ、絵巻の原本を所蔵する延岡城・内藤記念博物館の学芸員が、絵巻に描かれた行列の成り立ちと、そこに描かれた行列の内容について解説します。

時田昌瑞「ことわざのコレクション」 外山 徹（商品部門学芸員）

展示 Zoom in!

本年5月から6月にかけて開催された企画展の出展品は、館蔵の「時田昌瑞「ことわざのコレクション」」の一部である。今回は、その来歴と全体像について紹介しよう。

この資料群は、「ことわざ研究の第一人者である時田昌瑞氏が半生をかけて収集されてきたものである。時田氏は2006年に設置された明治大学研究・知財戦略機構の特定課題研究ユニット「明治大学ことわざ学研究所」（研究代表者：山口政信法

テキストと図像の組み合わせ

2008、2009年の両年度にかけて博物館が受贈した資料は1450点にのぼる。今回の企画展に出展されたのは、この内、江戸時代から昭和戦前期にかけての絵画資料である（一部、現代に至る立体物を含む）。「ことわざを人々の間に流布させた媒体として、ことわざと図像の組み合わせを複数掲載した刷り物を紹介したが、字札と絵札を組み合わせたかたもまた、同じパターンでことわざを表現する格好の媒体であった。その意味では、これらも図書館に収蔵された古文獻とともに、「ことわざ集」の1ジャンルを構成するものと言える。これらの資料の存在から言えることは、ことわざが口承やテキストとして伝承されるばかりではなく、図像として非常に豊かな表現方法を生み出してきたことである。

●錦絵・刷り物・印刷物 江戸時代から明治初期にかけて出版されたカラー木版印刷による錦絵は、「ことわざ集」の体裁を備えたものと（写真1）、一つ

のことわざを採り上げた（写真2）。2種に分かれる。ことわざは「譬え（＝例え）」とも呼ばれ、論評（見立て）における寸評の手段として用いられており、歴史上の人物や芸能者などが対象となっている。これには、テキストのみの一覧形式のものと、論評の対象を描いてことわざを付したものがあつた。また、引き札をはじめ、縁起のよいことわざをデザインした印刷物も数多く作製されていたことがわかる（写真3）。

●かるた コレクションの中で最も大きな比重を占めるのが、かるたである。いろは47文字を頭文字とすることわざかるたには、江戸を中心に出回った「犬も歩けば棒にあたる」ではじまる「江戸系いろはかるた」と、それとは全く異なった構成による関西に流布した「上方系いろはかるた」（写真4）の二つの系統がある。かるたは時期的にも江戸末期から現代のものまでが揃い、近代以降、江戸系の構成を部分的に改変した「新案系いろはかるた」、江戸・関西が混在する「混交形いろはかるた」といった内容構成の変化を追うことができる。さらに、ことわざかるたとは別に「郷土かるた」「学習かるた」「文芸・芸術系かるた」「キャラクターかるた」も充実し、札の大きさ、素材、絵柄やパッケージデザインの変化、その時代特有の空気の反映など、我が国におけるかるた文化を総合的に俯瞰するだけの材料がそろっている。

ことわざの生活文化への沈着

時田コレクションのすごいところは、ことわざ自体が記された文献資料ばかりではなく、立体物を含むあらゆる物品に及んでいる点にある。つまり、「ことわざ」にまつわるものであれば、手当たり次第に入手したということになるが、結果としてこのことが我が国におけることわざ文化の深みを見事に証明するものとなっている。これらの立体物には、図像表現の発展形とも言えることわざ自体を立体像で表現したものもあるが、多くは実用の道具類にことわざの図柄があらわれたものであり、生活空間へのことわざ文化の沈着という点から、非常に重要な意味をなすコレクションと言える。人々はかくもさまざまなことわざに囲まれて生活を営んでいたのである。

●絵画・工芸 ことわざには哲学的な含意のあるものや、縁起のよさに関わるものがあることから、古くから絵画や彫刻のモチーフとしても好まれてきた（写真5・6）。工芸品と呼ぶべきものには、ことわざそれ自体を立体像として表現したものと、器物の絵柄としてことわざが用いられたものの2種に分かれ、後者のパリエーションが豊富である。江戸時代、刀装具や根付に、好んでことわざがモチーフとして用いられたのは興味深い。この場合、字句が記されるわけではないが、見る人は造形から即座にその含意を理解したはずである。「鯉の滝上り」のような縁起ものというよりは、刀の鏢に「猿猴が月」（写真7）、「蟪蛄の斧」など、洒落つ気のあるものが印象的である。



写真1 教訓いろはたとへ 歌川芳盛(1862)



写真2 「玉磨かざれば光なし(小野篁)」(19C後期)



写真3 引き札「瓢箪から駒」(1902)



写真4 上方系いろはかるた(19C後期)



写真9 長着「瓢箪から駒」(19~20C)



写真8 磁器小皿(19~20C)

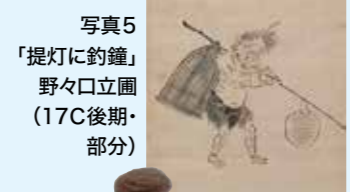


写真5 「提灯に釣鐘」野々口立圃(17C後期・部分)



写真6 木彫「韓信の股くくり」(19~20C)



写真7 鏢「猿猴が月」(18~19C)

●生活資料・現代商品 工芸品のように繊細な意匠を凝らした高級品ばかりではなく、庶民が日々の暮らしの中で使用した、あらゆる生活用品の中にことわざは浸透していた。陶磁製の皿鉢類（写真8）や着物に羽織・半纏といった染織品（写真9）、装飾調度から商業看板に至るまで。その多くは「富士、二鷹、三茄子」や「瓢箪から駒」「竹に虎」などで、縁起物としての性格を有するものが目立つが、ことわざというものはかくも日本人の生活の奥深くに入り込んでいたものかと、つくづく感じ入る。そして、それは現在もなお、また、未来に向けて文化として受け継がれてゆくものに違いない。

茨城県三昧塚古墳の埴輪とその構成

忽那敬三（考古部門学芸員）

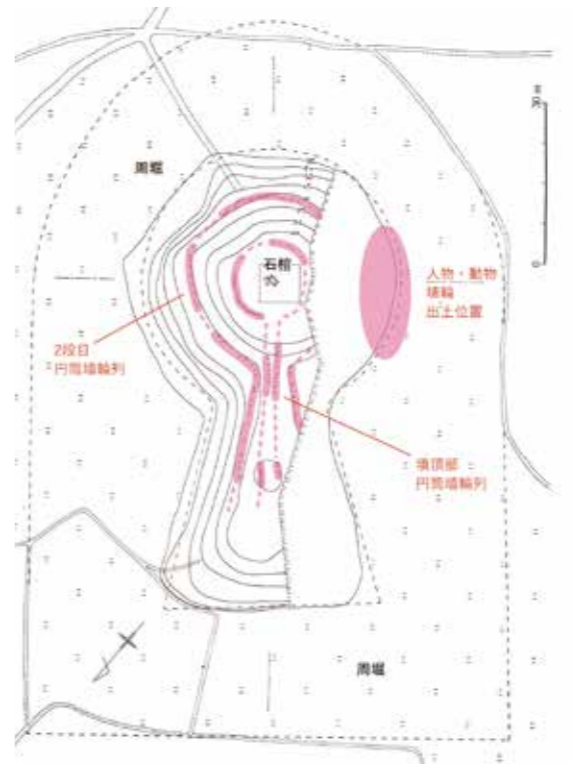
1 三昧塚古墳とは

茨城県行方市玉造町沖洲に所在する三昧塚古墳は、全長87mの前方後円墳である。1955年、霞ヶ浦の堤防建設のための土取り工事による破壊を契機として、茨城県による発掘調査が行われた。調査には明治大学考古学研究室の後藤守一教授、大塚初重助手（いずれも当時）が加わり、後円部の中央から国内で唯一の馬形飾付金銅製冠のほか、2千点以上に及ぶおびただしい武器・武具・鏡・装飾品類が副葬されていた組合式箱式石棺が出土したことで、茨城県を代表する古墳として注目されてきた。年代は5世紀末頃（TK47型式期）と考えられ、2018年には主要な出土品が国の重要文化財に指定されている。三昧塚古墳といえはこうした副葬品に注目が集まりがちであるが、埴輪も相当数が出土している。円筒埴輪のほか、家・馬などの動物・力士など人物の形象埴輪が知られているが、これらは茨城県内における人物・動物埴輪の初期の例であるとみられており、副葬品と同様に古墳時代の首長間関係を考えるうえで重要な手がかりとなると思われる。以下では、円筒埴

輪の配列と、形象埴輪群の構成を検討し、どのような影響下で成立したのかを考えてみたい。

2 円筒埴輪列

三昧塚古墳は葦石をもたない2段築成の前方後円墳であるが、2000年に明治大学考古学研究室が協力した玉造町（当時）の発掘調査で、最下段に墳丘に沿った形の基壇部が巡ることが判明している（小林編2001）。円筒埴輪列は、初回の調査において墳丘最上段の平坦部と墳丘中段（2段目）テラスで確認されており、いずれも後円部から前方部に連なっている。このうち、最上段については、調査時の写真の検討から「17」の注記がある個体（重文附17番）が後円部北西の個体であることが小澤重雄氏（茨城県立歴史館首席研究員）により特定された。さらに、調査図面との照合から、注記「B4」の個体（重文附22番）が墳丘中段の西側くびれ部のものであることも判明



1. 三昧塚古墳の墳丘と埴輪列
（斎藤ほか1960を一部改変、作成協力：杉本茉織）

した。古相を示すとされる方形の透孔がある個体は注記がないため出土位置は不明であるが、今後配列場所と各個体の特徴の分析が期待される。なお、調査時の埴輪検出図では中段の前方部端にも基底部とみられるドットがあることから、少なくとも中段の埴輪列は全周していた可能性が高い。また、2000年の調査で墳丘の東側・西側から朝顔形埴輪の破片が出土しており、普通円筒埴輪列に朝顔形埴輪が数個おきに加わる構成で

あったとみてよい（小林編前掲書）。なお、朝顔形埴輪は肩部に円形の透孔が開けられる玉里舟塚古墳などと同様のタイプであるという。

円筒埴輪列について、『三昧塚古墳』（斎藤ほか1960）では、南西側墳丘裾部から形象埴輪が集中して出土している点、墳丘の反対側の南東裾では、かつて1m間隔で芋穴が掘られ、埴輪が出土していたことを評価して裾部に3重目の埴輪列（形象埴輪を含む）が巡ると推定している。しかし、2000年に検出された8カ所の基壇部では埴輪

の基底部は見つかっていない。出土した埴輪片も多くが胴部以上であり、裾部（基壇部）に3重目の埴輪列が巡っていたのか、明確には判断しがたい。現状では、確実な円筒埴輪列は2重である。

3 形象埴輪群の構成

これまでの報告では、家4、人物6（跪く人物1、力士2、女子1、男子2）、馬3（うち飾馬1）、鹿1、犬?1（報告書では20点程度と推測）とされる。茨城県立歴史館所蔵資料を筆者が実見した限りでは、人物の腕は接合資料を含めて13点である。また、人物が頭の上に載せたか捧げ持ったと思われる壺もある。人物の台部は6点あり、双脚立像とみられる2体の力士（重文指定資料の尻・腰前部）とあわせると、人物は8体以上となる。跪く人物、力士、壺を持つ人物の存在から、王を中心とする儀礼シーンが表現されていた可能性が高い。動物の脚部は、馬とみられる底径10cm程のもの6点、鹿、犬、猪など他の動物と考えられる底径5cm程ものが15点確認できた。その数から、馬は2体以上、他は4体以上が確実である。馬は尻部に馬具表現があるが、頭部の資料には鬃表現がない。これを裸馬とすれば、飾馬と裸馬の2種となる。他の動物は、体に斑点を描く鹿のみが確実である。器財は、蓋の傘部や壺の鏝と思われる破片と、甲冑の肩部らしき破片（武人埴輪の可能性もある）がある。茨城県内で器財の例は少なく、注目される。以上から、少なくとも22点以上（家4、人物8、馬3、鹿など4、器財3）であり、人物・動物は

15体以上で茨城県内では玉里舟塚古墳に次ぐ規模である。墳丘南西部に造り出しがないことから、幅約3mの基壇部に配列していた可能性が高い。力士以外の人物埴輪がかなり小型に作られているのは、狭い基壇部内に形象埴輪群を収める必要があったためと思われる。では、三昧塚古墳の形象埴輪群の系譜はどの地域に求められるのだろうか。構成から見ると、人物による儀礼と馬・鹿を複数並べる場という2種のシーンを有する点で5世紀後半の保渡田八幡塚古墳（群馬県）外堤A区形象埴輪群との関係を考えざるを得ない。同群は54点で構成されるが、双脚立像の力士、壺を持つ人物、2種の馬、鹿、甲冑もあり、跪く人物も近隣の保渡田遺跡で出土例があるなど共通点が多いことから、三昧塚古墳の形象埴輪群は、同古墳と相通する埴輪祭祀の考え方のなかで製作された可能性が高いと言える。造形表現や製作技法の差異など課題はあるが、同地域との比較研究を今後も進めていく必要があるだろう。

本稿を成すにあたり、資料の実見等で茨城県立歴史館の小澤重雄氏よりご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

主要参考・引用文献
小林二郎編2001『三昧塚古墳第3次発掘調査報告書』玉造町遺跡調査会・玉造町教育委員会
斎藤忠・大塚初重・川上博義1960『三昧塚古墳―茨城県行方郡玉造町所在―』茨城県教育委員会
伝田郁夫2004『茨城県行方郡玉造町所在三昧塚古墳出土形象埴輪の資料整理報告（2004年）』『茨城の形象埴輪』茨城県立歴史館、pp.261～270



2. 後円部頂北西部の円筒埴輪列
（矢印が注記「17」の個体。当館蔵）



3. 注記「17」の円筒埴輪
（重文附17。茨城県立歴史館蔵・写真提供）

シヤチと縄文人のつながり

南雲 茜

シヤチはクジラ目ハクジラ亜目マイルカ科に分類され、クジラやイルカなどの仲間として扱われる。ハクジラは「歯」をもつクジラのことを指す。仲間にはマッコウクジラやカマイルカなどがおり、水中で生活する哺乳類である。上下合わせて40本前後の歯を持ち、魚類やペンギン、クジラなどの動物を食べる。体長は約10mまで大きくなり、遊泳速度は最高時速約80kmと哺乳類最速を誇る。今回は、当館が所蔵するシヤチ（サカマタ）の歯を紹介しながらシヤチと縄文人のつながりについて探っていく。

当館が所蔵するシヤチ（サカマタ）の歯は、明治大学教授であった杉原庄介氏が、千葉県市川市にある貝塚を調査した際、貝塚貝塚（船橋市古作貝塚の一部。縄文時代後期か）にて採集した資料である。長さ12cm、重さは80gほどで先端は丸みを帯びており、加工痕は見られない（図1）。補足すると古作貝塚は、2点の土器から50点以上の貝輪が出土したことで知られ、大規模な馬蹄形貝塚であったと考えられている。



図1 シヤチ（サカマタ）の歯

縄文時代の貝塚からクジラ類やイルカ類の骨が出土している例はあるが出土量は少なく、縄文人がシヤチを含むクジラ類の漁を積極的に行っていたとは考えづらい。おそらくストランディング（生きた状態で座礁し海へ戻れなくなってしまふ、海に戻れず死んだ状態）したシヤチを周辺の集落と共に解体し、各集落に分配していたのだろう。実際、東京湾沿岸地域にある横浜市青ヶ台貝塚（縄文時代中期～後期）や松戸市貝の花貝塚（縄文時代中期～晩期）でシヤチの骨や歯が見つかっている。

2021年の日本におけるクジラ・イルカ類のストランディング272件に対し、シヤチは2件のみである。貴重な例として、福岡県直方市に位置する天神橋貝塚からは、シヤチと同じく希少なマッコウクジラの骨や歯が見つかっている。

クジラの歯の垂飾^{サシモノ}が出土している。シヤチについても、シカやイノシシなどに比べ貴重な存在であったとみられることから、その歯を所持、または装飾品に加工することによって、縄文人に魔除けとして重宝されたのではないかと考えられる。

なお、本記事の作成にあたり市立市川考古博物館の領塚正浩氏から貴重なご教示をいただいた。厚く御礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 市川市史編纂委員会1971『市川市史』第1巻 吉川弘文館
- 杉原庄介1982『市川市の貝塚』（第三版）市川市教育委員会
- 田邊由美子2000「東京湾沿岸地域における縄文時代の鯨類利用」『日本海セトロジー研究』第10号 pp.31-36
- 国立科学博物館 海棲哺乳類ストランディングデータベース <https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/drift/index.php>
- 福岡市博物館 アーカイブズ（企画展示 No.328 土の中のクジラ） <http://museum.city.fukuoka.jp/archives/leaflet/328/index.html>

NEWS

NEWS 04

江戸アートエキスポ 書道展を3年ぶりに開催



毎年秋に開催される「EDO ART EXPO（江戸アートエキスポ）」は、東京都中央区、千代田区、港区、墨田区の名店、企業、ホテル、神社仏閣や文化・観光施設などが合同し、既存の施設をパビリオン（会場）に見立てて、江戸から続く伝統や文化、芸術を紹介する催しです。当館も江戸の捕者や刑罰をテーマとする国内唯一の博物館として関連展示会場となっています。今年「コラム展」・「桜田門外の変と延岡藩」を開催するとともに、付随するイベントである「東京都の児童・生徒による『江戸書道展』会場を3年ぶりに引き受け、各企業賞の入選作品40点を館内に展示しました（9月23日～10月11日）。なお、中学・高校生合わせて5名に明治大学博物館賞を授与しています。

NEWS 05

南山大学人類学博物館との交流事業

■交換特別講義、3年ぶりの対面授業

去る5月24日、南山大学黒澤浩教授の講義「博物館概論」において、出張授業をおこないました。「大学博物館の使命と機能」というタイトルで、各地の大学博物館設置状況と当館の事業実践を紹介し、73名が受講しました。コロナ禍により一昨年は中止、昨年はオンライン講義でしたが、名古屋では3年ぶりに対面授業が実現しました。11月には本学の学芸員養成課程「博物館実習」の講義を黒澤教授にご担当いただき、南山大学人類学博物館の実践についてお話を伺います。

■交換展示も3年ぶりにリアル展示が実現 南山大学人類学博物館のマコन्द彫刻たち

会期 9月24日（土）～11月5日（土）
会場 常設展示室考古部門



シェタニ像

アフリカ・タンザニアの彫刻コレクションを紹介しています。時代によって製作地域や目的が変化し、それに伴って大きく形を変えてきたマコन्द彫刻の様々な姿をご覧ください。

南山大学会場

@名古屋

化石人類の系統と絶滅動物

— 明治大学博物館コレクションより —

当館の旧石器時代関係資料を展示しています。

M2 カタログ

特別展「新しいお殿様 ―所替・その後―」 関連グッズを製作!

ぜひ展覧会をグッズでもお楽しみください!

巻物をそのままプリント
ますきんぐてえぶ(日本東西道中画)

絵図の折り目や
毛羽立ちが、味のある
古文書らしさを伝えます。
¥150(税込)

江戸～西国の
果てしない道のりを、
お手元で辿ってください。
¥400(税込)

延岡城を中心に、内藤藩の白杵郡の領地を見てみよう
クリアファイル(延岡御城附絵図)



※写真はイメージです

ミュージアムショップ開室時間

月～金 10:00～16:30 土 10:00～12:30
※日曜日・祝日 8月10日～16日 8/1～9/19の土曜 11月1日 12月26日～2023年1月7日 1月17日は閉室
※販売品・価格・開室時間は変更する場合があります

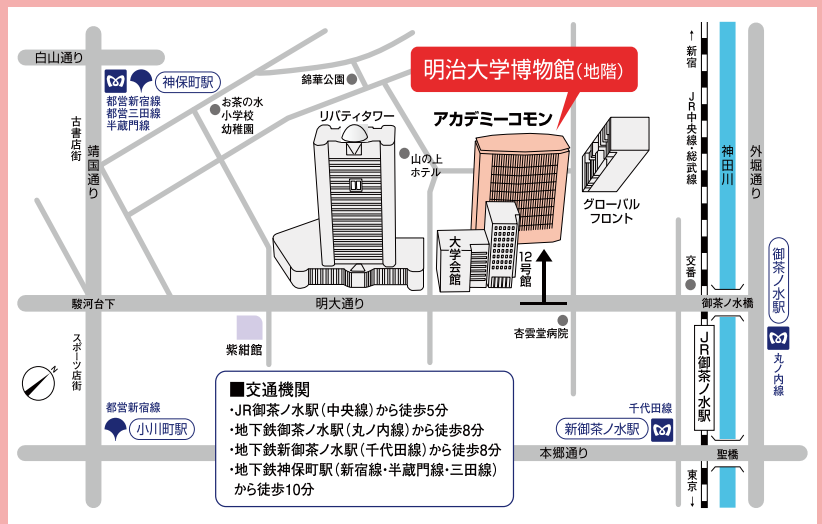
来館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
平日 10:00～17:00 (入館は16:30まで)
土曜 10:00～15:00 (入館は14:30まで)
- ◆休館日
日曜・祝日 8月10日～16日 8/1～9/19の土曜
11月1日 12月26日～1月7日 1月17日
- ◆観覧料
常設展無料
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- 現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、オンラインによる事前予約制を導入しています。詳細は博物館ホームページをご覧ください。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。



現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、展示室・図書室・ミュージアムショップの開室日時については変更・臨時閉室する場合がありますので、博物館ホームページで確認してください。